

# SUSONO

vol.3  
[2018.3]

まちなかが楽しいから、  
毎日が楽しくなってきた。



前橋市移住コンシェルジュは  
あなたの夢を応援します。

移住コンシェルジュ  
鈴木正知



<https://www.facebook.com/maebashijju/>

## Let's Learn 上州弁

海はひれえな、  
でっけえなあ。



井上武士  
いのうえ たけし

1894年、群馬県勢多郡芳賀村（現在の前橋市芳賀地区）に生まれる。「うみ」「チューリップ」など、耳に馴染みのある童謡の数々を手掛けた作曲家。東洋音楽大（現東京音大）などで教授を務め、小中学校の校歌なども多数手掛けた。

### 解説

「ひれえ（広い）」、「でっけえ（大きい）」など、形容詞が「え」で終わりがち。「とても広い」ことは「えれえひれえ」と言う。

前橋にある企業の仕事や様々な取り組みを紹介します。  
あなたに合った“前橋での働き方”が見えてくるかも！？

## ハロー！WORK まえばし

未経験でも自分を磨き続けられる楽しい環境

システムセイコー株式会社

機械部品の製造販売を手がけるシステムセイコー株式会社。半導体の製造装置や検査装置、各種省力機器や治工具の設計・製作、医療関連装置の部品製作を行う。新しい生産拠点として2016年に前橋工場の稼働を始めたばかり。「とにかく人が大事。経験の有無以上に、技術を身につけたいというやる気のある人に来て欲しい」と社長の細野さん。「待遇向上で従業員との信頼関係を積み上げることが大切だ」との信念から、社員旅行や勉強会、改善提案制度など、社内の雰囲気づくりに注力している。文系の若者や女性にも技術者に挑戦して欲しいそう。地域活性化に貢献している企業として、平成29年度産業振興・社会貢献優良企業として表彰された。



協力 システムセイコー株式会社  
群馬県高崎市福島町713-5（前橋工場は前橋市亀里町878）

## 移住コンシェルジュ便り



前橋市の中心市街地は、JR前橋駅と群馬県庁を結ぶ約2キロのちょうど中間にあります。「なんで駅前じゃないの？中心市街地・商店街は駅前でしょ？」と思う方もいらっしゃるが、そうじゃないのが前橋なんです。それはかつて生糸で栄えた時代に遡ると見えてきます。当時貨車で生糸を横浜まで運ぶために、汽車の煙で「糸が汚れないように」の配慮もあったとか？当時のレンガ倉庫や生糸仲買、養蚕農家もまちなかにチラホラ見かけることができます。

前橋や桐生に横浜銀行があるのも当時の貿易の名残で、当時を知る銀行の方に聞いたところ、「前橋や桐生に浜銀があったら、今でも当分の誇りです」と誇らしげに話してくれました。すっきり生活からシルク文化が薄らいだまちなにも、様々な形の市民活動が見受けられるのは、嬉しい限りです。かつては養蚕古民家だった建物の再生など、今だからできることもたくさんある「まえばし暮らし」。例えば「やま・さと・まち暮らし」など、自分に合った暮らし方を選

び、〇〇暮らしの中に当てはめることの出来るちよちよ良さがあります。中心市街地には、かつて栄えていた時代を知っていて、昔はよかったです」と話す店主や住人も多い一方、その暮らしぶりや好景気を想像すらできない世代や移住組（自分もそのうちです）は、かつての魅力とは違うところから、まちの魅力を感じていきます。その魅力とポテンシャルが、若者たちを惹きつけ始めていっているのではないのでしょうか。

### 鈴木正知（すずき まさと）

東京都町田市出身。上野動物園や葛西臨海水族園の飼育員、長野県戸隠一ノ宮キャンプ場管理人インタープリター担当などを経て、2006年に前橋市へ移住。市内23の行政区を集めて地域活動の情報共有をする「前橋地域づくり協議会」や「前橋の地域若者会議」を立ち上げて以来、前橋市の地域づくりに携わる。2015年より、前橋市の移住コンシェルジュに就任。



## ユニーク U-29ピープル

管理栄養士  
竹内美彩紀さん（23）

出身は神奈川県です。有楽町で行われていた移住相談会を通して、2017年に前橋へ移住しました。現在は、前橋市内の病院の管理栄養士として、食材の発注や外来でいらっしゃる患者さんへの栄養指導などをしています。学生時代は実家から都心の学校へ通っていたので、社会人になったら実家のように自然に近い場所です。そんな私にとって、前橋はイメージ通りでした。休日は近くのパン屋さんや県内の観光スポットを巡ったり、近隣県にもアクセスしやすいので、新潟や茨城の花火大会へ出掛けたりもします。地元も遠すぎず、気軽に帰れる距離感なのがありがたいですね～！



歩いて帰ろう Y字路は思い出を誘う ここにパン屋が あそこに靴屋があったわかれ道にぎやかだった昔 軽やかにになりたい今



Instagram  
@susono\_maebashi

### 取材メモ

フリーペーパーを手がけるようになって10年は経つけれど、どうやら面白く読んでもらえるか、毎回悩み始めている。この「susono」を作り始めるときに、ある職員の方から「移住者のリアルを伝えたい」と言われて、ストンと腑に落ちた。デザインというものは、さほど魅力的でない何かをささめ力的に見せることだっただけでいいわけだが、ここでやるべきことは違うのだと。ありのままをありのままに見せる」というデザイン。それは、自分が一番やりたいことだったのかもしれない。変わらない良さは、変わらないかっこ悪さと裏腹で、心ときめく新しさは、飽きられてしまう不安と裏腹で、ここ数年、新しくお店を始めたり、事業を始めた知り合いもこの街には多く「チャレンジしやすい街のスタイル感」という言葉がしつこくくる。その「懐の深さ」こそが、前橋らしさなのかもしれない。気負わず、無理なく、自然体の「前橋」を、この冊子から読み取ってもらえたら嬉しい。（サイン・殿岡 渉（あしかが園案））



きっかけごろごろ。  
チャレンジできるまち。

前橋のまちなかには、商店街が9つある。そのうちの1つ、以前は映画館があり賑わっていたというオリオン通りに、大学生と社会人の6名が住むシェアハウスがある。前橋工科大学への進学を機に前橋へやってきた、富山県出身の館季幸さん(26)と鳥取県出身の吉田祐介さん(25)の2人は、学生時代にこのシェアハウスに住み始め、今では2人もまちなかで働いている。彼らはどうして、前橋のまちなかに「住む」働くという生活の拠点を置くことにしたのだろうか。

まちなかに住み始めて、  
価値観が変わった

館「ぼくは富山県で生まれ、新潟市で育ちました。前橋市よりも人口が多く、都会的な雰囲気がある新潟市にすつとしたので、初めて前橋に来たときは「遊ぶところが無いなあ」と思いました(笑)。駅前のけやき並木通りだけじゃ、何故か印象に残っていたんでしょね。自転車走ったら気持ちよさそうだなあ、なんて、よく妄想していました」

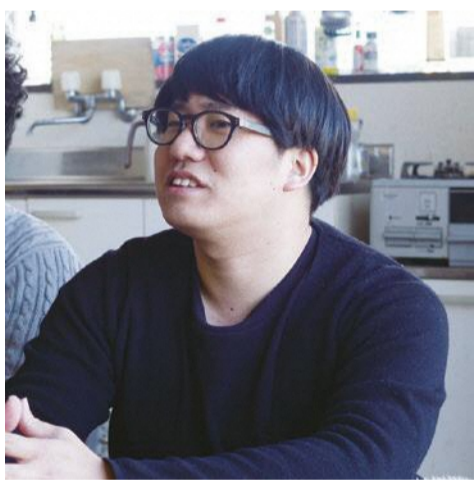
吉田「館さんとは反対に、ぼくの地元はものすごく田舎だったので、前橋は都会的に映りました。商店街への憧れが強かったこともあり、学生時代にはまちなかの研究をしていました。そんなある日、まちなかをリサーチしていてアーツ前橋に立ち寄った時、「ちょっと片付け手伝ってくれる？」と学芸員さんに声を掛けられたんです。手伝いが終わると、そのまま飲み会に誘われて、初めて会う大人たちとワイワイ過ごしました(笑)。その時、まちなかにいれば、ひよんなことから様々なタイプの大人たちと知り合ったり、コミュニケーションを取ったりできるんだなって思っただけです。こういう雰囲気面白くて、気が付いたらまちなかに住み始めていました！」

館「ぼくが住み始めたのも、家賃が安いという情報を『ひよんなところ』で知ったからでした(笑)。まちなかやシェアハウスといったことには特に興味がない人間でしたが、実際に住み始めてみると、徐々に価値観が変わっていきました。お腹が空いたら同居人を誘ってまちなかの飲食店へ向かう、面白そうなお店があったら一緒に出掛けるといった具合に、気がついたら、徒歩圏内で行けるお店やイベントを、積極的に楽しむようになっていく自分がありました。最初に感じた『遊ぶところが無いなあ』という印象は、いまや完全になくなっていますね。まちなかという環境のおかげで、いろいろな遊び方を覚えていった感じですよ」

まちなかに残り、  
進学。そして就職

大学の同じ研究室に所属し、同じシェアハウスに住みながらまちなかを満喫した2人は、卒業後も前橋へ残ることを決意。館さんは卒業後、市内の建築設計事務所へ。吉田さんは、さらにまちなかの研究を進めるために大学院へと進学します。その後はそれぞれ別の道を歩んでいた彼らは、2016年に、前橋のまちづくりを担う団体として立ち上がった「前橋まちなかエージェンシー(以下、MMA)」で、再び合流することに。

吉田「大学院を卒業して、すぐにMMAに就職しました。2015年にまちなかで行われていた「前橋〇〇特区」(以下、MMA)というイベントの運営を手伝ったことがきっかけで、MMA代表理事の橋本さんと出会ったんです。建築の勉強も継続しつつ、これまでまちなかと関わってきたことが生かせる仕事をするのがいいんじゃないかということで、声をかけてもらいました。元々、橋本さんの本業である建築設計事務所にもすごく興味があったので、そういうことなら尚更、MMAで働いてみたいと思いました。かつこいい建築も好きなのですが、デザインが得意なわけではなかったため、MMAで色々なことを広い視点で見たいと思いました」



館「卒業後は、住宅を主に取り扱う前橋市内の設計事務所へ働き始めました。お施主さんに家を引き渡すというゴールが明確な仕事だったんですが、自分が良いと思ったデザインを提案しても、必ずそれが上手くいく訳ではなかった。苦勞の連続でしたね。例えば、窓が大きく開放的な設計の家を作っても、お施主さんから「周辺の家からの視線が気になる」という意見を頂いて、設計を作り直したこともあり。次第に、建築のことだけやっていても、視野が狭くなってしまふのかもしれないと考えるようになって、吉田くん相談を持ちかけました」

吉田「一緒に住んでいるのに、なぜかファミリーと呼び出されて。シェアハウスでいいじゃんと思っただけを今でもよく覚えています(笑)」

館「今のまちづくりって、引き算タイプが多いのかなって。つくりたい建築。ものすごく極端に言うと、官民の負担を減らすために全部広場にしようという。今は、それが正義みたいな風潮が漂っている気がするんですけど、ぼくは建築というものが好きなので、建築にもっとできることがあるんじゃないかな、と思っただけです。そんな中でMMAは、建築物をつくることで、まちを変えるんだという力強さを感じて、「ここに入ると面白いのかも」という思いが強くなってきました」



吉田さんと館さんが学生時代から住んでいるシェアハウス「共同亀屋住宅」。現在も学生・社会人を含む6人がここで共同生活をしている。シェアメイト同士で遊びに行くこともあるそう。



刺激を受けながら  
のびのびと働ける環境

彼らが地元を離れて前橋にやってきてから、5年以上の月日が流れる。東京やUターンといった選択肢を選ばずMMAに入社し、前橋のための仕事に邁進する2人。

吉田「ぼくの担当業務は、アーツ前橋が発行する機関誌の制作進行やアーティスト・イン・レジデンスのスケジュール管理といった「コト系」で、館さんの担当は、図面を書いたり建築管理をする「モノ系」といったところでしょうか。入社して1年ほどで、取材交渉など初めて取り組むことばかりですが、普段出会えないような人と会う機会が多いので刺激があり、毎日が面白いです」

館「前に勤めていた建築事務所は、マンションの1室がオフィスで、なかなか気が抜けない環境だったんですけどね。外に出られるのは、お弁当などを買いに出掛けるほんの数分間だけでした。ところが今は、自分の裁量で仕事ができる状況なので、疲れを感じたら外の空気を吸う、打ち合わせに出掛けるタイミングでまちなかを歩きながら体を動かすなどの、のびのびと仕事することができています」

吉田「あとは、モノやイベントがひとつひとつカタチになってくのが嬉しいですよ。毎月の制作物もあるので、コンスタントに休感できます。それから、色々な業種の方と知り合う機会も増え、憧れだった建築家の方と打ち合わせでお話できるのもすごく刺激的ですよ」

館「これまでの仕事に加えて、『前橋に、もっとデザインの色を』とうたったデザインスクール事業を、4月から月1、2回をめぐりに本格的にスタートさせる予定です」

チャレンジしやすい  
まちのスケール感

吉田「このまちには、あらゆるきっかけがごろごろ転がっています。商店街では、お店の方や知り合いとすれ違ひざまに挨拶をして、イベントではまたまた来ていた友人と語り合います。他にも取材や打ち合わせ、まちなか内などを通して本当に様々な人に出会いますし、最近増えてきたアートの関連の動きや新しいお店のオープンなどからも、色々な発見があります。旅行者や外国人も行き交うようになってきました。その気になってセンターを働かせれば、働きの面白さや新しい趣味を見つけていくことができるでしょう。どんな風にも変化したり、進むことができます。だと思えます。自分が一歩踏み出した先には、スカッと視野が広がる土地なのではないでしょうか。まずは、自分の好きなことに一歩踏み出してみよう。その舞台は、ぜひ前橋で！」

館「このまちのスケール感なら、チャレンジしやすいと思います。自分にやりたいうことがあって悩んでいる人は、前橋でやってみたら面白いんじゃないでしょうか。若い人や新しいことを始める人が沢山いますし、そういうことに興味のある人も沢山いますよ。地元の新潟にもまちなかをシェアしたいと思うくらい、毎日が面白いことだらけですよ」

吉田「仕事以外でも、ぼくらが住むこのシェアハウスから発信できることがまだまだありそうなんです。昨年には、リビングのこたつを自作してみたり、周辺のイベントで、シェアハウスやまちなかのことを発信するワークショップを企画したりしたのですが、このシェアハウスらしい動きをもっと創り出して伝えていきたいんですよ。お金がない・実行力がないという大きな課題をどう解決するかがポイントですが(笑)、ここからがぼくらの腕の見せどころですよ！」

一般社団法人  
前橋まちなかエージェンシー

2016年に発足した、群馬県前橋市の中心市街地にある「まちなか」を拠点に活動する団体。前橋に点在するあらゆるヒト・モノ・コトを繋ぎ、価値を増幅させる「コミュニティハブ」とし機能することをミッションに掲げている。

発足当初から、「前橋に、もっとデザインの力を。」をコンセプトにした「前橋デザインプロジェクト」をスタートさせており、長坂常氏、中村竜治氏など著名な建築家を迎えた商店街の店舗プロデュースや、クリエイティブな人材を育成する双方向の学び舎「前橋デザインスクール」がそれぞれ動き出している。

館さん・吉田さんのおすすめ

西洋亭 市

(せいようてい いち)

前橋市千代田町 2-12-12



馬場川通りと中央アーケードの交差するあたりに店を構える、老舗のソースカツ屋さん。創業から守る秘伝のタレは、醤油ベースのうえに酢もたっぷり。さわやかな後味がたまらない。

店内には小説から漫画本まで幅広いジャンルの本が置いてあり、本やコーヒーとともにゆっくり落ち着いた気分でも過ごせるのも魅力の一つだ。様々な組み合わせで配置されるテーブル・椅子・ソファや、店内に立ついくつもの柱、存在感の控えめな窓などが手伝って、誰でも気軽に、自分なりの空間を創ることが出来る。この心地よさは、まるで「穴蔵」のようでもある。

前橋ビジョン  
「めぶく。」  
とは？

前橋市は、2016年2月から官民連携による取組みとして、一般財団法人田中仁財団と共に、今後のまちづくりに向けた前橋ビジョン策定プロジェクトを推進。財団がブランド戦略を依頼したドイツのコンサルティング会社「KMS TEAM」は、前橋市民に聞き取りなどを行い、「Where good things grow. (いいものが育つまち)」というビジョンの原型を示した。このビジョンの原型を、本市出身の糸井重里さんが独自に解釈し、同年8月に前橋ビジョン「めぶく。」を発表。現在、前橋市内では「めぶく。」に沿った市民主体による様々なアクションが始動中。写真は2016年に行われた、ヤマダグリーンロード前橋での前橋ビジョン発表会の様子。

